

経営者の人となりを知る



人物探訪



有限会社 デザインルームエム

代表取締役 水野 泰雄 氏

● 水野社長が語る幼少時代

歳が離れた3人兄弟の一番末っ子で、今とは比較にならないくらい甘えん坊でした。凄くハチャメチャだったので、何かあると私のせいになりました。「あいつがやったんじゃないか」と言われるくらい元気な子でしたね。

● 趣味は??

趣味は仕事!! 365 日休日。「今日は仕事だ」と意識しない。仕事だと思ふと気が重くなるから、365 日休日だと思ってやっています。体を動かすことではゴルフです。

芹澤:今の仕事に就かれたきっかけを教えてください。

水野:漫画が好きで、小学生の頃から描いていました。ほのかに漫画家になりたいというのがあったので。一応、高校一年の時に準佳作をとるところまで行ったんですけど、そこで限界も感じましたね。そこからは漠然と絵に携わるようなものに行かれば良いかなと思っていました。高校を出て、御茶の水美術学院という専門学校に行きました。通い始めて1回目の試験でいきなりトップになって、そこでも「世の中簡単じゃん」みたいになってしまって(笑)その後、尊敬している先輩を見ても全然就職できていなくて、絵じゃ食えないという現実を見てしまったんですよ。将来的なことですごく迷いましたね。

夏休みに上田に帰ったとき、コーヒーショップでアルバイトをしていたら、「いずれ自分で喫茶店出せるからやらないか」と言われて、その会社に就職しました。メニューを描いたり、ポップを描いたりしていたら、お店に顧客さんに「うちの店の包装紙のデザインしてくれ」「店の壁に飾る絵を描いてくれ」と言われて、デザインでこんなに金もらえるだ!おいしい仕事だなって(笑)描くことは出来ても商業的なことはまったく分からなかったので、印刷系のコピー会社に入って印刷や印刷のためのデザインを覚えました。そこに居る間はすごく勉強しましたよ。製版のことは別の会社で夜アルバイトをして、印刷後の工程を覚えました。その会社が倒産したときに、どこに行っても会社というものは潰れるんだから、どうせ潰れるなら自分でやろうかと思ったんですね。

芹澤:早くから起業されたんですね。

水野:23 だったから今 30 期目ですね。あの当時倒産した会社の社員が仕事をするなんてとんでもない話。デザインの機械を買うといってもメーカーが限られてるから、あの会社の社員だ、と行って売ってくれなかったんだけど、たまたま「水野さんだったら良いよ」と言ってくれる人がいて、30 年ずっと付き合っています。機械ものに関してはそこ以外からは買わない。あのとき信じてもらえて嬉しかった気持ち。本当に素人が自分のやりたいという想いだけで始めた会社です。

芹澤:30年やってきて、今自分が大切にしている仕事観は?

水野:やっぱり「一生サービス」。お客様のそばに寄って、お客様の困っていること、欲しいサービスを提供していく会社で、それを一生続けていく。昔は料金表を作ってやっていただけやっぱり駄目なんです。人の気持ちって面白いもので、その料金に合わせようとするんですね。サービスの価値をお客さんが認めてくれた対価と

してもらおう会社になっていきたい。

芹澤:サービスを相手が理解してくれるきっかけはどんなところにあると思いますか?

水野:難しいですけど、相手の懐に飛び込めるかどうかですね。だからまずは飛び込みやすくするために努力をしている。同友会や、それ以外のところでも頼まれたりすれば入って、自分の会社はこんな会社だよというものを広めていく。そうするとうちの社員が仕事行ったときも、「水野さんのところの」ということでひとつそばに寄れるじゃないですか。出来るだけ自分は直接の仕事じゃなくて、間接的にいろんな業界に飛び込んでいって会社のことを印象付けています。

芹澤:今までの営業はほとんど水野さんのスタイルだと思うんですけど、これからはどう考えていますか?

水野:新しい仕事の繋がりというのは、間島くんが Loop38 という集まりをしていて、今の人たちはそういうところに集まって、その中から仕事が発生していく時代なんですよ。それは彼らたちのやり方で、私のやり方ではない。外からは応援するけど、一切口は出さない中には入らない。自分のやり方を踏襲するんじゃないで彼らのやり方でやっていけばいい。周りとの軋轢は絶対にあるから、その時に自分がいるんなら顔を出していることは絶対に生きてくる。「エムさんのところの関係でやってるんだ、じゃあしょうがない」と言われるようにしておきたい。そこが自分の一番の仕事ですね。

芹澤:こういう業界だからどんどん技術革新も進んでいくと思いますが、社員に対しての理想像はありますか?

水野:そこが今一番苦しいところで、自分が第一線にいた頃は足りないものが見えたんですよ。一線を退くと今足りないものが非常に見えづらくなる。どういう教育をしていくかというのが一番の悩みで、今は第三者に協力してもらっています。この業界の第一線で活躍している人たちの HP やセミナーでいい言葉があると、その情報をみんなに流して各自見てもらおう。あとは毎月私が読んでもらいたい本とかを回したり。何しろ業界の変革が激しいので、常に情報は掴んでおかないといけない。だから、外から自分の会社がどう見られているかという情報を正しく入れなければいけな

い。30代40代の頃は「何をやってるんだ」と言ってくれる人がいたから良かったけど、このくらいの歳になると言ってくれないから。そうなる危険ですよ。

芹澤:外からどう見られているかという感覚を社員の中に育てるにはどうしていますか?

水野:トップや営業は意識せざるを得ないけど、中にいる人たちはどうしても良いものをつくるというところに比重がいくので、前は全部フィルターを通して理解しやすいようにしなければいけないという気持ちがあったんだけど、今はそのままストレートに伝えて、それを受け止めてどう感じるか。うちみたいなものづくりの会社は、お客さんの声をストレートに伝えることが一番いいのかなと思う。

芹澤:デザインルームエムの具体的な将来像は描けていますか?

水野:変化対応企業と言っていたくらいなので、あまり固定化はしないです。デザインルームエムの商品はサービスだから、お客さんによって変わっていくもの。お客さんの望むものも変われば、それによって変えていく。だからクレームとか要望が来なくなったら終わりですよ。

芹澤:企業連携についてどう考えますか?

水野:うちは企業のコラボということを昔からすごく考えていて、例えば産業展なんかも、民間の何社かを集めて任せたら良いものが出て来ると思うよ。自分達は死活問題だから、自分のところのお客さんをここに招待して仕事を取れるようにしたい、そういうイベントになっていくはずだから。企業同士のコラボレーションは机の上じゃなくて実践のなかでやるべきだと思う。

芹澤:最後に、水野さんのモチベーションの高さの秘訣は?

水野:秘訣はないけど、仕事上で自分が会った人を見ていても、元気な人や笑顔の人を見たときの方が絶対気持ちいいじゃないですか。気持ちを元気にしておくようにという努力はしています。なるべくストレスを溜めないようにするとか、好きなことをいっぱいやるうとか、美味しいものを食べるようにしようとか、怒られないようにしようとか(笑)そういう風に自然となっていくんですよ。

インタビュー: 芹澤 廣

※文中の名前は敬称略とさせていただきます。